

小学校における防災教育体制と砂防探検隊が果たした役割
 —磐井川砂防探検隊に参加した小学校を対象として—

岩手大学農学部 ○伊藤綾乃 井良沢道也 中村和作

1. はじめに

1.1 本研究の背景

防災を考えなければならないのは何故か。その最終的な目的は、災害から「命を守るため」である。日本はその地形・立地や気候などの条件により、災害が発生しやすい国“災害大国”と言われている。近年も平成23年の東日本大震災や、平成25年の東北地方や伊豆半島を襲った土砂災害など、日本各地で自然災害が発生している。しかし我々人間よりもはるかに強大な自然現象を操作することは難しく、災害をゼロにすることはできない。我々にはできることは「災害に備えること」であり、それによって被害をできるだけ防いでいくことである。観光や旅行などの外出先で被災するケースもあることから、いつどこで誰が被災するかを予想するのは困難である。しかしその一方で日本防災の脆弱点として「防災意識の低さ」が指摘されており、「自分は大丈夫」と思い込んでいる人々が多いのが現状である。災害から命を守るためにはひとりひとりの防災意識の向上が不可欠であるが、そのための手段として防災教育が注目されている。防災教育を通して、災害への備えを行う心理的なきっかけを与えるのである。その中でも学校教育における防災教育の実施が注目される理由としては、①義務教育は市民の普遍的な機会であること、②児童を媒介とした防災波及効果が期待されていることの2つが挙げられる。しかし学校防災教育においても3つの課題が指摘されており、(I)防災教育の実施内容、(II)学校教育におけるカリキュラム、(III)教員に関する課題が残っている。(I)では学校防災教育での実施内容のワンパターン化が指摘され、(II)では学習指導要領改訂により防災教育に割ける時間が減少したこと、(III)では教師の負担量の問題や、意識的な問題、あるいは各主体連携レベルでの防災教育実施ができていないことが指摘されている。

1.2 本研究の目的

本研究では「小学校の教育体制において砂防探検隊が果たした役割」を明らかにすることを目的とする。学校防災教育が様々な課題を抱える中、今回調査対象とした砂防探検隊は行政と学校の連携、あるいは学校と保護者が関わり合いながら実施されたことが特徴として挙げられる。各主体が連携して防災教育を実施したことで、背景で述べたような防災教育が抱える課題が改善されたのかどうかを、学習会の効果も合わせてみていく。つまり、①探検隊参加により児童の防災への関心は高まったのかどうかの「内容面」からと、②探検隊が各小学校でどの

ように受容されたのかの「制度面」からの視点により、今回の砂防探検隊が学校防災教育において果たした役割を明らかにする。探検隊が児童へ与えた効果と、探検隊が学校防災教育へどのように働きかけたのかを明らかにすることで、砂防探検隊がもつ可能性の検討と、今後の防災教育を実施する上でのポイントを整理したい。本研究の構成と流れを図1に示す。

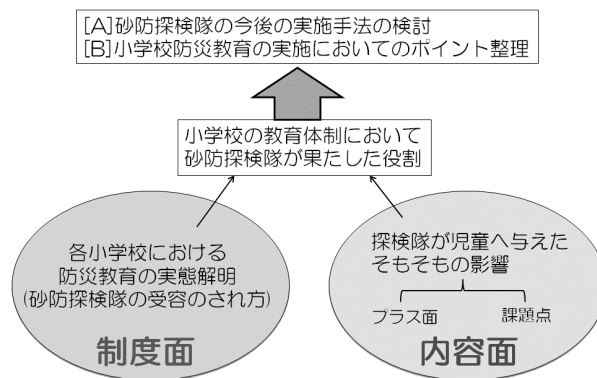


図1 本研究の構成と流れ

1.3 調査対象および調査方法

本研究では、小学校ごとの防災教育への取り組みの違いが児童にどのような影響の違いとして現れるのかを比較する必要があったため、同じ学習会に参加した小学校とその児童を調査対象とした。調査対象校は6校で、調査対象児童数は165名である。調査対象は表1に示す。

表1 調査対象校一覧

実施日	学校名	参加学年	参加児童数
6/4(火)	厳美小学校	5年生	37名
6/10(月)	赤荻小学校	5年生	58名
6/14(金)	本寺小学校	3~6年生	20名
6/19(水)	滝沢小学校	5年生	30名
	弥栄小学校	5年生	5名
	舞川小学校	4年生	15名
	合計		165名

調査方法は、①児童へのアンケート調査、②教員への防災教育に関する聞き取り調査の2つを用いた。①児童アンケートでは、時間経過による防災意識の変化も見たかったため、(i)探検隊参加前、(ii)参加から2週間後、(iii)参加から4か月後の3期間の状況を問う形式とした。

2. 砂防探検隊の概要

調査対象とした磐井川砂防探検隊は、国土交通省岩手河川国道事務所、岩手県、一関市が主体となって実施している防災学習会である。主に岩手宮城内陸地震時の災害現場(一関市災害遺構)を見学し、児童らはそこで災害

についての説明を聞くという流れであった。探検隊の実施内容は学校ごとに若干異なるため、表2に一覧で示す。また、探検隊参加前後の取り組みも学校ごとに異なっているため、表3に一覧で示す。

表2 探検隊実施内容

砂防探検隊	嚴美	赤荻	本寺	滝沢	敦栄	舞川
	出発式 一関市災害遺構見学					
・市野々原被災地展望広場	○	○	○	○	○	○
・市野々原2号えん堤	○	○	○	○	○	○
・祭路被災地展望の丘	○	○	○	○	○	○
・祭路大橋見学通路	○	○	○	x	x	x
特別講義	x	x	○	x	x	x
	終了式			昼食		
一関市防災センター(あいぼーと)見学	x	○	x	○	○	○
特別講義	x	x	○	x	x	x
	終了式					
備考	午前終了	-	特別講義形式	雨天	雨天	雨天

表3 探検隊前後の実施内容

		嚴美	赤荻	本寺	滝沢	舞川
導入	6.14の復習	○	○	○	○	○
	学習のねらい説明		○			
	探検隊の流れ説明					○
	地震についての復習					○
フォローアップ	探検隊内容のまとめ	○		○		○
	土砂災害について授業					○
	学校便りに掲載	○				○
	作文(児童)		○	○	○	○
	作文(保護者)			○		
	ポスター作成				○	○
親への報告指示	○	○	○	○	○	

3. 調査結果と考察

3.1 砂防探検隊と小学校

3.1.1 教員の探検隊への評価

探検隊の感想を教員に聞いたところ、「過去の地域災害を知る良い機会となった」「実際に現場を見ることができたことが大きい」「防災教育の方向性が出てきた」「学校だけではできないことを実施できた」という声があった。多くの教員が探検隊に参加したことを「良いきっかけ」として受け止めていた。しかし一方で内容改善を課題にあげる教員もあり、「実施時間が長い」「少し余計な内容もあった」との声があったことから、実施内容に関しては小学校と相談しながら実施することが求められる。

3.1.2 教員が挙げる防災教育に関する課題点

探検隊に参加した小学校教員が感じる防災教育の課題としては以下の3つのグループに分けることができた。

1点目は、防災教育の実施方法が不透明であること。2点目は、防災教育に割ける時間が限られていること。3点目は、保護者や地域を巻き込んだ実施ができていないことであった。このような課題が挙げられた一方、今後の防災教育に対する考えを聞いたところ、どの学校においても防災教育に対しては積極的な姿勢であることが分かった。教員の防災教育に対する積極的な姿勢があっても、今回の調査で明らかとなった課題点が壁となって現れ、防災教育が展開されにくい現状があることが分かる。

3.2 砂防探検隊と児童

3.2.1 探検隊が児童へ与えた影響

探検隊は児童の災害関心にどの程度影響を及ぼしたのか、つまり探検隊の内容面を検証した。関心の指標として「自然災害に関する会話量」「自然災害に関する自主学

習の有無」を用いた。その結果、参加後の自然災害に関する会話量と自主学習量は共に増加していたため、児童の災害への関心を高めることができたと判断できる。また、探検隊に参加したことで「土石流」や「地すべり」といった災害を初めて知った児童が多く、新たな地域災害を知るきっかけにもなった。

3.2.2 小学校別にみた児童の防災意識傾向とその要因

小学校別に児童アンケートの結果を比較し、その要因を考察することで、防災教育を実施する上でのポイントとして次の2点が明らかとなった。

1点目は、参加前後の導入・フォローの必要性である。導入やフォロー授業の実施が弱い学校では、探検隊参加後の会話量が他校に比べて低く、また探検隊の記憶量も時間と共に大幅に減少する結果となった。カイ2乗検定の結果、会話量と記憶量に関係性があったことから、会話をよくする児童ほど探検隊の記憶量が高いことも明らかとなった。児童の会話を促すための工夫が求められる。

2点目は、保護者への学校側からの働きかけの必要性である。保護者を巻き込んで実施した学校では「おうちの人と一緒に学べたので家の人と話そうと思った」という児童の感想があった。また、参加した親と学校の間では防災に対する意識共有も図られたようである。保護者を巻き込んだ防災教育の実施がより求められそうだ。

3.2.3 児童と一関市災害遺構の関係性

探検隊参加後、児童と一関市災害遺構の間には「再見学」という関係性が生まれた。参加児童の約4割は探検隊後も災害遺構を見学しており、再見学した児童ほど災害に関する会話量も増加していることが明らかとなった。災害遺構を探検隊で取り上げる価値が深まったと言える。

3.2.4 砂防探検隊の今後の課題点

今後の課題点としては、行政と学校の連携(学習内容の相談)、保護者の巻き込み方、見学だけで終わらせない内容工夫等が求められると考えられる。

4. まとめ

砂防探検隊の「内容面」としては改善点が挙げられるが、探検隊によって児童は災害への関心を深めることができた。防災意識向上にはまず関心を持つことが必要であることから、今回の学習会は児童へ良い影響を与えることができたと言える。小学校の「制度面」としては、防災教育に積極的な先生が多い一方で、なかなか防災教育を推進できない現状があることが明らかとなった。しかし教員は探検隊を防災教育の良いきっかけとして捉えていたことから、行政からのアプローチは小学校における防災教育のひとつの支えとなり得る。また災害遺構には再見学性があることから、探検隊参加後も継続的な防災意識の啓発が期待できる。そのきっかけを探検隊で与えることができたと考えられる。

〈参考文献〉

・矢守克也ら：夢見る防災教育，晃洋書房出版，2012